



「横のデパート」街となった五所川原市の本町。左に「中三」、奥に「マルキ飛鳥」が見える。  
1970年代後半・青森県史編さん資料

太平洋戦争の敗戦前後に、五所川原町（現五所川原市）は2度の大火を経験した。その意味で、現在の五所川原町

所川原市は戦後に発展した都市といえるだろう。都市には歓楽街が形成さ

は、駅前近くの東町が歓楽街となった。その先駆けとなったのが料亭「富貴」であり、バー「らんぶる」だった。東町は別名「らんぶる通り」と呼ばれ、歓楽街の象徴的存在だった。

東町の近くには駅と町役場があった。五所川原町は周辺の松島、中川、長橋、三好、栄、飯詰の6村と合併して五所川原市となった。周辺の村々から鉄道やバス

（パート）だった。1964（昭和39）年に本町の「中三」、4年後に柏原町の「マルキ飛鳥」が百貨店となった。

その後、百貨店を中心に当時「横のデパート」と言われたアーケードが建設された。1966（昭和41）年の大町を手始めに、1972（昭和47）年には本町と柏原町、1977（昭和52）年11月には寺町

に、各アーケードが完成した。

## 五所川原市の歓楽街

### 中園裕

（県民生活文化課  
県史編さんグループ主幹）

を使い、駅前や市役所周辺に多くの人やモノが集まった。市役所へ出入りする業者も激増した。こうして大町や東町に人が集まり、歓楽街が形成されていったのである。

歓楽街の近くには小売店を中心とする商店街が形成された。五所川原市の場合、大町や寺町、本町や柏原町に商店街が形成された。商店街の中心は百貨店（デ

と、川端町に歓楽街が形成された。大資本の少ない地方都市では役所の存在が地域産業の鍵を握る。隣接する大きな都市がない五所川原市は、西北津軽郡町村の消費人口を吸収できた。このため1960～70年代の県内飲食店販売額は、青森市と県内の1位・2位を分け合っていた。

1980年代以降、全国的に都市計画が実施され、地方都市の街並みや構造は

大きく変わった。大手資本による郊外型ショッピングセンターが各地に登場した。五所川原市も例にもれず、1997（平成9）年には「エルムの街ショッピングセンター」が誕生した。

五所川原市には中央通り、本町、大町と3つの商店街組合があった。商店街全盛期を支えた商店街だが、今年のはじめに大町商店街組合が解散。すべての組合が姿を消した。

しかし、2004（平成16）年完成の「立佞武多の館」を中心に、老朽化したアーケードを解体。僅かに焼け残った「布嘉御殿」の煉瓦塀や、作家太宰治に関わる家屋を活用するなど、繁華街の遺産を活かした街並み造りが模索されている。

繁華街や歓楽街は歴史的に移動する性質を持つ。だからこそ時代ごとに街並みの歴史を記憶に留め、記録を残しておきたい。そこから未来の街造りに必要な独自性や物語性が見つかるからである。過去を理解することから未来への展望は広がると思う。